

浄 土

the JODO
1993
9月号

今月の随想

吉野 弘 本田捷彦 長谷川岱潤

昆布の浜と函館山 夏 攸吾

念仏信仰の系譜③ 須藤隆仙

TVキャスターのアンゲル② 利根川 裕

法然上人のお念仏 ひろさちや

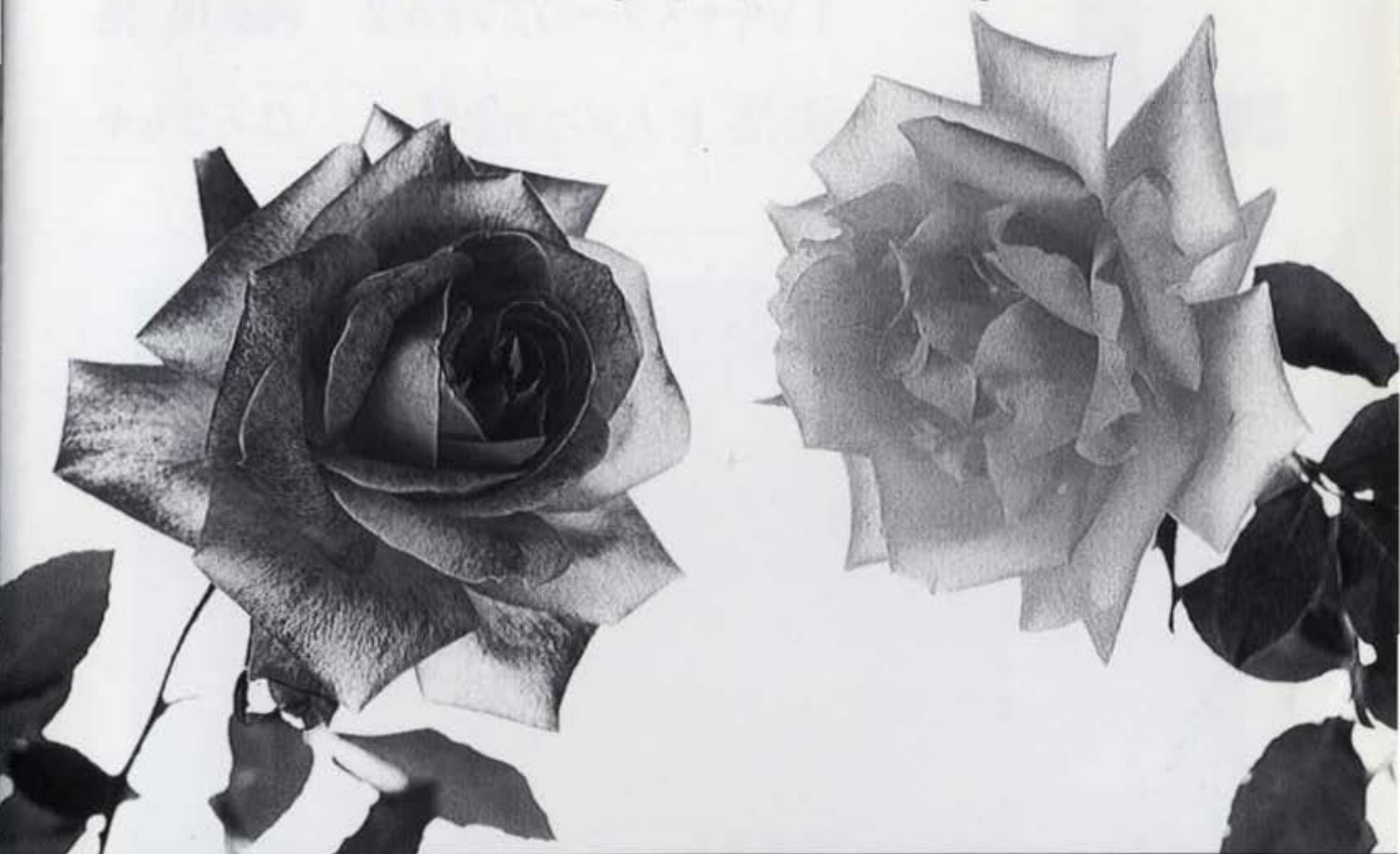


法然上人鑽仰会発行

わかり合うことは、

語り合うことです。

以心伝心。古来から日本では、黙っていて
も心は通じるものといわれてきました。
でも、やっぱり話さなければわからないこ
とってありますよね。もっとお互いがわか
り合えるために。日本テレコム・0088
でゆっくりおしゃべりしてみませんか。



0088なら、もっと気軽に、もっと長〜く話せます。

●例えば、東京(03) ↔ 大阪(06)間なら
25.4%もおトク。

※平日夜7時に15分間電話した場合

●かけ方は、アタマに**0088**を回すだけ。

●月々の基本料金は一切ナシ。

※NTTの基本料金は従来どおりです。

●電話機・電話番号もそのまま使え、
ご自宅での工事なし。

安い市外電話

0088

.....
0088のことならなんでもお気軽にお電話で。

日本テレコムお客様センター

☎ **0088-82** (無料)

または、☎ **0120-0088-82** (無料)

●受付時間 9:00~20:00(年中無休)



函館山からの眺め

函館を歩く

写真—夏 攸吾

函館山はどこから見える





年ごとに輝きを増す函館の夜景



昆布の浜に漁船が帰る



昆布を広げ終えてひと休み

函館山の麓、谷地頭の碧血碑



碧血碑への道を彩る紫陽花



浄土

1993/9月号



目次

函館を歩く——**口絵**……………写真=夏 攸吾 3

今月の随想

生の深みを動かすもの——死……………吉野 弘 8

死は未知でよし……………本田捷彦 12

大事にしたい心……………長谷川岱潤 16

昆布の浜と函館山……………文と写真=夏 攸吾 20

念仏信仰の系譜——**③**……………須藤隆仙 28

テレビキャスターのアンクル——**②**

ショーアップされる死……………利根川 裕 34

法然上人のお念仏……………ひろさちや 40

編集後記……………48

表紙撮影=落合泰三

生の深みを 動かすもの — 死



吉野 弘

死が意外な力で生命の深所を動かしているものだと、あるとき痛感したことがある。

私は現在、茶所・狭山市に住んでいるが、此所に移り住んで間もなく、地元製茶業者の一人から茶の木の生態について話を聞く機会があり、茶の木を通じて、生と死との強い関わりを思い知らされたのである。以下、その経験談をご報

告させていただく。

狭山市に移り住んだのは、もう二十年も前の秋で、茶畑にはあまり目立たない感じの白い花が咲いていた。間もなく秩父風ちちぶふうの吹き荒ぶ冬すさを迎えたが、冬が去って春の彼岸に入った頃、わが家の裏の茶畑で苗木作りの作業が始まった。もちろん、私が初めて見るもので「取り木」と

いう作業だった。

茶の木は躑躅つづみの木のよう、株の根もとから幾つかの幹に分かれているが、その内の主要な枝を横に引き出し、その中ほどを皮付きのまま折って（親木から切り離さない状態で）、折り口を地中に挿しこみ、その状態を固定する。地中に挿しこまれた折り口から根が生えた頃、親木から切り離して一本の苗木として独立させるのが「取り木」。原理は「挿し木」と同じだが、「挿し木」より苗木が育てやすいとのことであった。

何故、種子から苗木を育てないのかを聞いてみた。理由はこうだった。

現在飲用に供されている茶は、山茶やまぢやという野生のものを人間の嗜好に合わせて品種改良し、さらに幾つかの品種を人為交配させたものだが、種子による苗木作りの場合は、元の品種の中の

あるものに先祖帰りをすることがあるのだという。茶の品質や特徴を一定に保つ必要がある茶所では、それでは困るので、親木の遺伝形質を確実に受け継ぐ「取り木」によって苗木を作る、というわけである。

茶所で得た初めての知識だったが、種子による苗木作りはしないのが通常ということであれば、茶の花は、新しい品種の茶を作る場合の他は不要ということになりそうなので、果たしてそうなのかを茶畑の人に聞いてみた。答はこうだった。

その通りです。良質の葉をたくさん採るのが私達の目的ですから、花は差し当たり不要。それに、開花には多量の栄養が消費されますから、花は咲かせないほうがいいのです。それで、茶の木の管理法として、私達は茶の木に肥料をたっぷり与えます。

施肥が充分ですと花がほとんど咲かなくなり、良質の葉も採れるというわけです。

茶畑には秋から冬にかけての花期でも花があまり目立たないのは、施肥が充分なためで、もし目立つほど花が咲いているとすれば、管理不良の茶畑と見ていいのだという。

次いで私は、茶畑の人にこんなことも教えられた。

植物の種子が発芽して茎や葉を具え、開花の前段階まで生長する過程を「栄養生長」と呼ぶこと。「栄養生長」は、根・茎・葉が植物の栄養器官に当たることから来ている名称であること。そして、この「栄養生長」の次の開花と結実への移行をなるべく阻止しながら「栄養生長」の状態を長く保つことが、茶畑を管理することであると。

一度に色々な新知識を注ぎこまれた私の頭は

少し混乱気味だったが、充分な肥料を与えられて開花を阻まれているという茶の木の状態が私には息苦しかった。それで私は聞いた。「施肥を打ち切って野放し状態にすれば、また花は咲くわけですね?」「ええ、ドツと咲きます。」「では、そういうときの生長状態を何と呼んでいますか?」「成熟生長と呼んでいます。」「

思いがけない言葉に私はたじろいだが一瞬私は「成熟」を促すものが死であることを直感した。

何故そういうふうにしたのか、筋道を立ててみよう。

肥料を充分与えられた茶の木が開花しなくなるのは、充分な栄養によって、いつまでも生きていることが出来るという錯覚が木の内部に生じ、死を忘れるためではなからうか。そして、肥料を打ち切られると開花するのは、茶の木の

栄養状態が自然のままの状態に帰ることとて、死への正常な予感を取り戻し、実を作ることによつて生き長らえ死に対抗しようとするのではないだろうか。つまり、開花と結実という「成熟」を促すのは死であると、私には思われたのである。

私の想像は、当然の成りゆきとして、茶の木から人間へと移っていった。人間がもし死ぬことのない生きものならば、果たして恋をするだろうか、子を生み育てるだろうか。恋し、子を生み育てるということは、茶の木の開花・結実と同じく、死を超えてゆこうとする生の必然的な営みではないか。

もしそうだとすれば、生命を継続させているのは、死の領域から生の領域に常に射しこんでいるレントゲン線なのではあるまいか。小文の冒頭で「死が意外な力で生命の深所を動かして

いる」と書いたのは、このような想像体験による。

余談になるが、「老年」を「熟年」と言い替えることで「老」を感じずにいようという人がおられるようだ。しかし、一度「成熟生長」という言葉に衝撃を受けた者から言えば、「熟年」という言葉から放射されてくる死のレントゲン線は避ける術がない。

なお、念のため申し添えると、植物生理学の用語に「成熟生長」は無く、これに相当するのは「生殖生長」である。「成熟生長」は茶の関係者の間での言葉のようであるが、植物の開花と結実単に「生殖」というより、死に対峙し死を超えてゆく営みであるという意味で、それをはっきり自覚させてくれる「成熟生長」は、実に含蓄に富む言葉と私には思われるが、如何であろうか。

(詩人)

死は未知でよし

M氏が「虚血性心疾患」で突然死されたのは、去年（平成四年）八月のことである。

いかにも戦中派らしい清貧と質実剛健を良しとし、折り目正しく、どちらかといえは今風の流行には無頓着な蛮力（ばんりき）ラタイプの人であった。

氏は、大手企業の広報部長を最後に、あっさりサラリーマン生活から身を退き、小さな工房を興して勝手気ままに、社内報やらPR誌やら



本田捷彦

の編集を請負うかたわら、折々、雑誌社などから飛び込んでくる依頼原稿を、気持ちよさそうに熟（こな）すのが日課だった。

氏は土いじりが好きで、家庭菜園を手掛けていた。

近郊の農家から五十坪ほどの山地を借り、雑木を伐採して菜園に切り開き、四季の野菜作りに意気込んでいた。

はじめは、工房での頭の疲れを癒すほどよいリフレッシュタイムぐらいに考えていたようであつたが、年々歳々、腕が上がり、収穫の手答えらしきものが実感し始まると、ますます菜園に身が入り、工房のことなどまるで眼中にないような日が続いていた。

氏は菜園に入る時、必ず畔に履き物を脱ぎ、裸足で土におりた。そして、ほんの一瞬、天を仰ぐようにして黙禱のポーズをとる。

ぼくがこの事を氏に尋ねると、なに、我流の自己催眠なんです、土に触れ、土と語る、こう唱えるんです。

と、はにかみながら答えた。

M氏がよく用いるボキヤブラリーの一つに、「縁^{えにし}」の一語がある。氏は無意識に使っているようであつたが、あまり多用されると些^{いささ}かうん

ざりのこともあつた。

しかし、そうはいいいながら氏とぼくは、この「縁」によつて交友が始まったのだつた。

その頃、氏もぼくもごく当たり前の同じ街から通うサラリーマン同士に過ぎなかつた。ところがある台風の夜、駅前の赤ちようちんで一緒にになり、M氏と隣り合わせるはめとなつた。酒が入り、互いに話しが弾むうち、文学の話となり、ぼくの口から飛び出した近年の書ける実力派作家として「黒部亨」なる地方作家の名を挙げたところ、M氏は急に顔を青くし、ぼくの手を強く握り、

黒部君は、私の親友ですよ！

といって絶句したのだつた。それから氏は、縁^{えにし}を連発し、たいへんな興奮ぶりだつた。後日、ぼくは黒部さんの懸賞小説「片思慕の恋」の載

った古い雑誌をお届けしている。

M氏が亡くなる一週間前、こんなことがあった。

夕暮どき、涼を求めて散歩に出たぼくは、たまたま氏の菜園の脇道を通ったので、何気なく中をのぞいたのだった。

と、おかしなことにあの真面目な氏が畑の真ん中で妙な踊りに浮かれている。何かよいことでもあったに違いない。ぼくはそう思いながら畑へ通ずる笹竹の茂った小道を進むと、夕陽が山際に隠れ、辺りが急に闇となった。

Mさん。浮かれてどうしたんですか。

ぼくは闇の中に声をかけた。ところが何らの返事もない。そして人の気配すらない。M氏の姿はどこにもなかった。ぼくは狐に撮つままれた思いで、なりふりかまわずその場から逃げ出して

いた。

ジャンケレヴィツチの説によれば、ぼくが見たM氏の幻視、これはへ死を待っている状態の死〳〵ということになるのだが、次なるへ死の瞬間における死〳〵に至るM氏の七日間は、安心立命あんしんりつを願い、ひたすら菜園の土へ還る下準備の時であつたのだろう。

此岸から彼岸へ渡る旅仕度に入っていたのだつた。

柳田國男も加藤周一も、そして高見順も、死の向こうにあるものをへ宇宙の中に入る〳〵という表現で語っているが、この考え方は、へ人死としては其魂かならず天へかへる。その魄かならず地に帰る〳〵と言った新井白石に通ずるものがあるし、宇宙飛行士ジェリー・カーンのへエネ

ルギー不滅の法則というものがある。エネルギーは形を変えるが決して消失するという事はない。人間の生エネルギーも形を変えて存続する。そして死後は宇宙全体のエネルギーの場には吸収され、一体化するということがあるのでないかゝは、もつと具体的だ。

同じ宇宙飛行士ミッチェルはへ人間というのは自意識を持つエゴと、普遍的霊的存在の結合体だ。人が死ぬとき自意識を持ったエゴは疑いもなく死ぬ。消滅する。しかし、普遍的霊的存在は残り、そのもとの出所である普遍的スピリットと合体する。だから人間は不滅なのだゝと。

先哲の論は、すべてがすべて科学の裏づけがあつてのコメントではない。けれども実際には、そうした先哲の論旨にかなり近いかたちの、例

えば転生、幽体離脱、霊体写真といった分野などでは、随分確かな科学的実証例が発表されているのも事実だ。

しかし、ぼくは死を必要以上に科学することには反対である。死者が中有の状態で浮遊し、七日ごとに四十九日までの間、男女の交接をうかがつて母胎侵入するさまを、例えばテレビで放映するようなことがあつたらどうだろう。

人間は、未知であることによつて、慈しみや、哀しみ、恐れ、恥しみ、愛を知る。ここに人間の生や死へのロマンがあるのだと思う。

ぼくもそろそろ、死というブラックホールを意識せねばならぬところにさしかかっている。が、出来得れば、死の隣まで死を思わないで生きる事が出来たらと思つてゐる。

死は、まだまだ怖いのである。(エッセイスト)

大事にしたい心

私の小さい時のことで、私自身はよく覚えていないのですが、母が言うことには、私の寺の墓地で古いお墓の改葬があつた時のこと、石屋さんがいくつもの古いお骨の壺を掘り出して地面に並べていました。そのお墓の家の人もそばで見えていたのですが、割れてしまい骨が出てしまった壺などを、困ったような顔をして眺めていました。母と一緒に三時のお茶を持って行っ



長谷川岱潤

た私は、その外に崩れてしまった泥だらけの骨を、「かわいそうに」と言つて素手で拭き始めたのだそうです。お墓の家の人はただただびっくりしてしまつたそうで、「お寺さんのお子さんですわねえ」と感心してくれました。

また、時折ご遺骨を本堂でお預かりすることがあります。小さい時からそんなふうにごく自然にご遺骨に接してきたせいか、怖いという感

情は起きず、ただ大切にしなければならぬものという気持ちで、お参りできるようになりました。寺に生まれ育った功德なのでしよう。

しかし私の友人などは、ご遺骨が本堂にあるだけで、本堂に入ることさえ躊躇しています。見ず知らずの人の遺骨は不気味に感じるのです。う。しかし、これが自分の肉親の遺骨となると、抱き締め、そばにあることになんら抵抗感がありません。肉親の情の深さを感じるわけです。

二、三年前ある霊園で、一時預かりのお堂が火災になってしまい、お骨が他のお骨と分別がつかず、わからなくなってしまうことがありました。未だに遺族との間でもめているそうですが、特に現代の日本人は、肉親の遺骨に対して特別な思いがあり、大事にしたい気持ちが強いように感じます。

人間にとって、善くも悪しくも最後に残すも

のが遺骨であり、残されたものがよすがとして最後に頼り、大事にしたいもの、それが遺骨なのでしよう。

私は八十九年にカンボジアのプノンペンを訪問したことがあります。カンボジアでは今年五月総選挙が行なわれ、漸くカンボジア人による国際社会に認められた政府がスタートしました。私が訪問した当時は、日本、アメリカをはじめ国連の議席をも、国外にある三十余万人の難民である民主カンプチア連合政権が持つており、七百万人のカンボジア国内のヘン・サムリン政権は、ソ連や東欧諸国以外のすべての国際社会から否認されていた時代でした。

また当時は、まだベトナム軍が国内に駐留していた時期でもあり、プノンペンから離れて郊外に行く時は多少の緊張が伴いました。しかし、プノンペン市内は町としての活気もあり、水の

不便さ（当時はまだ上水道と下水道が混合してしまっていました）を除けば、物価も安く暮らしやすい町でした。

ただし、国際社会から国として認められず、国際社会との交流、物流ができないということは、国家にとっては大変なことですから、何とか認められたい、過去にこういうことがあり、どうしてこういうことになってしまったのかということを知ってみたいという思いは、すさまじいものがありました。

トウール・スレーンという、もとは高等中学の学校だったところが、ポルポト時代に刑務所として使われ、さまざまな拷問・虐殺が行なわれた場所がそのまま残っていましたし、またある部屋では、頭蓋骨によって部屋の壁一面に、カンボジアの地図が作ってありました。

また、静かな田園の中にあるチェーン・エツ

クは、ポルポト時代に何千、何万人という子供・婦人・僧侶などが殺され埋められたところで、穴から掘り出されたシャレコウベが、四面ガラス張りの供養塔の中に、整然と積み上げられていました。

我々はそれらの供養塔の御前で、ただただ一心に念仏供養をいたしました。そして同時に、同胞の亡き骸をこのように露見してまでも虐殺のあった事実、ポルポト派の実態を示さなければならぬ、今のカンボジアの人々の心情に強く哀憫の情をもちました。

何故ならカンボジアの人々は、我々と同じ大变に信仰深い仏教徒であり、ご先祖の恩を尊ぶ生活をされている方々です。ご遺骨をただ単に物質と見ているわけでは決してないのです。ただポルポト派への憎しみがそれに勝っているのだと思うのです。

昨年度から開始されたタイ領難民キャンプからの難民の帰還は、今年の三月ではほぼ終了し、その数は三十七万人を上回ったそうです。この国連指導の下に行なわれた、人だけを列車やバスなどを使って大急ぎで帰還させることには、当然のように無理が伴いました。そのひとつが遺骨の問題です。

十三年に上る難民生活の中で、十万人以上の人が命を失い、満足な供養も行なわれないまま葬られています。今回の帰還には当然これらの遺骨の持参が許されませんでした。タイ国内に残されたこれらの遺骨は、このままではゴミとして処分されてしまうことになってしまい、このことを知った在日カンボジア協会の人たちが立ち上がって、曹洞宗国際ボランティア会の人を動かし、現地に飛び、回収整理された六五〇〇柱の遺骨を遺骨箱に納めて、カンボジア国内のバ

ツタンバンに帰還し、身元のわかる方には返却し、わからない方はその地に供養塔を建立して安置することになりました。

近親者の遺骨を大事に思う心は、自分に置き換えれば充分理解できるはずです。その遺骨と切り離されてしまったカンボジアの人々の心情を思うと、こういう決定を下した政治が憎くなります。その国の人々の気持ちになって、大事にしたいものを大事にしてあげるという、基本的な姿勢が一番ではないでしょうか。

今この遺骨帰還事業への基金を、アーユスII 仏教国際協力ネットワークで集めています。心ある方は是非浄財をお送りください。

アーユスII 仏教国際協力ネットワーク

〒一三五 東京都江東区清澄三―四―二二

Tel〇三―三八二〇―五八三一

(東京・戒法寺住職)



船から昆布を運ぶ

昆布の浜と 函館山

文と写真 夏 攸吾

そこは真昆布のふるさと

昆布のはなしをしよう……。

小雨まじりの風が吹くなか、私は静ま

りかえった海辺の道を、歩くくらいゆっ

くりした速度で車を動かしていた。人影

のない昆布の浜のむこうに函館山がかす

み、「よお」胸のうちに呼びかける。昆

布は北海道の特産、ほとんど全道どこの

浜でも採れる、「されど函館」と思わせ

てしまうところが、函館山の偉大さ。函

館は函館山があつての函館。函館山がな

かったら、魅力の大半は色褪せる。

それに、じつは函館で昆布のはなしを

する根拠もあるのだ。

ざっと歴史をひもとけば、昆布の名が

記録にあらわれた最初はたぶん、七九七

年（延暦一六）の『続日本紀』。朝廷へ貢



大森浜の啄木小公園、むこうに函館山が見える

献の品目にされたのは、はやくから開けた松前・江差あたりの細目昆布だったらしい。くだって一三三四年（建武元）、

『庭訓往来』に名産「宇賀昆布」の紹介があり、これがいまも高級出汁昆布として知られる道南産の真昆布。宇賀浦というのは、啄木小公園のある大森浜の続き、だから函館を真昆布発祥ゆかりの地としてもいいのである。ただ、現在は地名が残るのみで、それらしい面影はない。

ほかに襟裳あたりの日高昆布、道東の長昆布、知床の羅臼昆布、道北の利尻昆布など。といっても私にや識別の自信なく、しかし、それも歴史からして必然のように思う。

なぜなら昆布は、北前船で専ら関西方面に運ばれ、昆布出汁薄味の近畿食文化

圏を醸成したものだからである。とろろ昆布や塩昆布などの加工品にしてもそっちが本場。

一方、私ら江戸・関東のほうでは、鰹節出汁の濃い味であり、庶民が食べる味噌汁の出汁といやずつと煮干しであつた……。

ともあれ、私は昆布が好き。味をしめたくっかけは、駄菓子の「都こんぶ」だったかと思う。そういや、あれだつて大阪のもの。

囚みに、気軽に昆布のあれこれ知るのには北海道昆布館がいい、函館から大沼をめざす国道5号沿い、七飯町の仁山峠下にある。北前船のルート上、福井県敦賀の昆布加工会社が開いた企業博物館で、展示場に負けず劣らず大きなマーケットや見学工場もある利益誘導型の施設

北海道昆布館（下）と館内の昆布ファクトリー



だが、なかなかよくできているし、昆布の海をドラマチックな迫力ある全展望ワイドスクリーンに展開して見せる。

さて、私が真昆布求めてうろついたのは、市街地なった宇賀浦より西、湯ノ川温泉から恵山^{えさん}方面に少し行った戸井^と町の海岸である。

八月は、ふつうなら昆布漁の真っ盛り。それが今夏は、生憎^{あいにく}の天候不順に泣かされていた。海峡の海は、岸から見る限り波静かで、だがまあなんと意地悪く押し黙る。

岩礁の海岸、猫の額ほどのささやかな浜、砂利や碎石を敷き詰めた干場にそぼ降る雨。湿った空気を吸い、干場の石ころ拾って嗅いでも、昆布の残り香、少おしだけ。……と、そのとき、背後で低く唸るモーターの音。一軒の漁家の納屋に動く人影を見つけ、私は救われたようにそちらへ声を投げていた。

対岸の下北半島に近い汐
首岬(上)出漁OKの旗
が揚がる(中)昆布を絡
め取る道具(下)



今年やぜえんぜん、ダメだな。ずつ
とこんな天気で水温もあがらんだも
の、よう育たん。

老漁師はしかし、さほど深刻そうでも
なかった。長年の自然相手の稼業でなれ
っこになったものか、渋く笑って見せる。

昆布の好不漁は一年おき、という。

どんな漁も解禁くちあけの一日で、だいたいシ
ーズンの見通しはたつてしまう。すでに

七月の半ば過ぎから採りはじめている真
昆布は、もう今シーズンの決着ついたよ
うなもの。ジタバタしたってはじめら
んと、潮焼けした顔の不敵な皺が語って
いた。諦めたように見せて、心底は決して
諦めないのが漁師である。

納屋に吊るされた昆布が機械乾燥の風
に揺れる。見るからに姿形のいい真昆布
に、葉体の縮れた安物の「がごめ」が混
じる。老漁師は千切った褐色の藻を見せ、

「ジンナンモ、わしらミミっていうが、
これが殖えるとよくないんだ」と教えた。
味よく値もいい真昆布は、繁殖力で雑藻
のミミにかなわないらしい。大きなもの
は七メートル、幅三十センチを超える図
体のわりにはデリケートなのである。

海峡の空は重く、対岸下北の陸影はぼ

啄木一族の墓



つとしている。きょうはカモメにも精彩がない。

グルタミシンの潮風

ここ戸井町の汐首岬^{しおくび}は本州と最短の距離、下北半島先端の大間崎^{おおま}まで直線で約十八・五キロ。よく晴れた日、望遠鏡で覗けば対岸の家並みまで見分けられると

いう。

私はこのたび大間から函館に渡り、その間の港で聞いた話が想い出された。

昆布は東北北部の海でも採れる。地元青森の新聞に今シーズン「昆布不漁」の記事があり、石灰藻という邪魔者が岩場にはびこったせいかと……と報じていた。

フェリーの港で、うまい生干しイカを焼いてくれた漁協婦人部のお母さんに尋ねたら、途方もない答えがかえってきたのである。

石灰藻ってサ、あれ、青函トンネルのせいらしいヨ。トンネル固めるのに、いっぱい使ったセメントが染みだして、流れてきたんだって。トンネルできるまでは、なかったんだもの。うちの父さんも昆布採りしてる



けど、底が真っ白で薄気味わりいつて……。生活排水なんかもあるし、

海が汚れてきたもんネ。

石灰藻の正体を私は知らない。それに、津軽海峡の潮流の早さを想えば、この話は漁民の被害妄想かも知れない。が、いまだにその存在を拒否する人もいる青函トンネル、まさかこんなところにまで影響を及ぼしていようとは思わなかった……。

この話を戸井の老漁師にすると、「こっちにや、それはないようだな」とそつけなく、「昆布がすんだらタコだ、ここ

のタコはうまいんだア」、ひよいと肩すかしだ。たしかに北海真ダコはプルンとして美味である、けれどとにかくいまの私は昆布干す浜の、五体に不思議な活力を吹き込むすばらしくいい匂いにめぐり逢

沖合の漁の様子を探る



いたい。

翌日いっぱい空模様はぐずつき、出直しは二日後になった。前夜、在住の友と函館山からの夜景を肴に、したたかに呑んだ酒のせいで不覚にも寝坊、といって慌てはしない。

幾度も目にした昆布の浜の活況は、すっかり脳裡にある。海峡の夜の闇を欺いたイカ釣り船が灯りを消して港に帰るころ、早朝の浜の高みに「日和見」が合図の赤旗を揚げれば、先を競って昆布漁船は波を蹴立てる。朝採り、その日のうちに干し上げるのが生命の昆布漁は、この「日和見」の判断しだい。沖合の、それぞれが狙いを定めた漁場で、長い「かぎとり」や「ねじり棒」を操り、岩場から昆布を引き抜き絡め取る。

函館山の東の麓、立待岬^{たちまち}にててみる。

啄木一族の墓があり、いまも私の血を熱くする函館戦争、北海道独立国を夢見た脱走軍戦死者慰霊の、俠客柳川熊吉^{きやうかう}が建てた碧血碑^{へきけつ}もあるこのあたり、谷地頭^{やちがしら}が私は好きだ。碧血とは、「義に倒れた志士の血は三年たつと碧^{あお}に変わる」という中国の故事にならない、ちやうどこの時期は付近の紫陽花、碧血の色を染めだすころでもある。

津軽海峡を見通す立待岬、恵山岬^{えさん}にかけての岸近い波間に、小舟が散っている。五時ころ出漁して、豊漁なら二時間ほどで船を一杯にして帰り、十一時の刻限までに三回はこなすところ、だが今シーズンはそうはいくまい。

朝市の食堂に行き、獲れたて夏イカの

刺身で朝飯をすませてから戸井町に向かう。

昆布の浜では母さん婆さん爺さんたち、夏休みの子らも手伝って干場の準備だ。



道にはみ出す昆布干し

双眼鏡で沖合の漁をにらみ、「きょうはなんぼかよさそうだワ」とはずむ声もある。

やがて昆布を満載した船が戻りはじめ、浜は一気に活気づく。ウインチで船を引き揚げ、獲物は背中やリヤカー、軽トラで干場に運ばれて行く。「昆布はいいんだけどもサ、なんせ採れねワ」、漁師は愚痴をこぼしながらもまあ満足の笑顔、久しぶりのことらしい、和気藹々の仕事ぶり。豊漁年の浜には、殺気だつほどの大声が飛び交っていたことを想うとちと寂しいが。小一時間もすると干場に広げ終えた昆布、褐色の葉が暑さ不足とはいえ夏の陽に透け、芳しい香りが漂いはじめる。そう、これこれ、グルタミンの潮風。私はこの匂いを嗅ぎたくてきたのだ……。



連載③

念仏信仰の系譜

須藤隆仙

「釈尊の出家に他力を見る」

結婚された釈尊は、ふつうの男のように子をもうけられました。男の子ですが、そのつけられた名が、何ともショッキングなのです。梵語でラーフラといい、漢訳では羅睺羅らくらとい

います。ラーフラは障碍しょうがいのこととて「邪魔・さまたげ」といった意味だそうです。月食もラーフラというそうで、それで一説には月食の日に生まれたから、そう名付けられたともありますが、別の説では、男子出生の報を聞いた釈尊が、「困ったことだ、障碍（邪魔・さ

またげ」が生まれた」と言っただので、それでそのままラーフラと名付けたというのです。そして、この説のほうが仏伝では一般的なのであります。

何という話でしょうか。自分の初めての子供に、障碍などという名を付ける親がどこにありましようか。また、「困ったことだ」とは何たることでしょうか。いかに釈尊であつても、この部分だけみれば腹が立ちます。

しかし仏伝学者は、以下のように説明しております。それは結婚後十年近くもたつてからラーフラが生まれたので、この子に対する愛着が障碍となつて、出家の決意をにぶらすことを恐れたからである（水野弘元『釈尊の生涯』と）。

そうすると、釈尊は結婚してから、それに満足することなく、出家することを考えていたということになるわけであります。父王は釈尊の陰うつな気性を直そうとして妃を配したのですが、それは何の効果もなかったわけであります。

そして、その出家の動機というものは、一つだけの原因ではなかった。水野先生はそれについても、次のように述べておられます。

一般人類、または生類の運命に対する悲しい思いが、異常に強く太子の心に迫つた以外に、個人的には、生母を失つていくという内心のさびしさも、王子（釈尊）の無常観を深めたであらうし、また、釈迦族がコーサラに隷属し、いつ亡ぼされ

るかもしれない累卵るいらんの危うさにあるということも、聡明な王子の心には強く響いたであろう。安閑として王宮の生活を樂しむ気になれなかった理由は、そこにあったと考えられる。(前掲書)

生類の運命ということに関しては、有名な「四門出遊」という話が伝えられております。

城市(古代インドの都市は城壁で囲まれていた)の四方の門から郊外に出た若き日の釈尊は、東門を出て老人を見、南門を出て病人を見、西門を出て死人を見、北門を出て出家修行者を見たという。そのことが自らも出家することを決意させたのであると、こういうのであります。

釈尊の出家というものを、このようにみて

きますと、その動機となった苦悩というものは、私たち凡夫とまったく変わらない苦悩である。人間みんなが持ち悩んでいるその苦悩、それを若き釈尊もお持ちになられて、それを常人よりはなお一層強くお感じになられておられた、より深刻にお感じになられておられた、そういうことがわかるのであります。

こうして釈尊は、約束されていた王位を捨て、家族を捨てて出家されるわけでありますが、学者はそれは二十九歳の時であつたとしております。

夜半ひそかに従者を起こした釈尊は、愛馬カンタカに乗って道を東にとり、コーリヤ国(母の生国)を経て、南方マツラー国との境にあるアノーマー河を渡り、そこで自ら刀を

もって髪を切り、装飾の具を従者に渡して王宮にかえらせ、出家の目的を達成するまでは絶対に帰国しないと告げさせた、というのであります。そして、着ていたぜいたくな着物を獵師のみすばらしい着物と交換してもらって、出家者の姿となつたと仏伝は伝えております。

父王は釈尊の出家を非常に心配され、五人の供くみにあとを追わせ、この五人も釈尊と一緒に苦行生活に入るのであります。ところが釈尊は、苦行生活を六年やっただけで、これは無益だとして、それを放棄してしまうわけがあります。それで五人の供は怒って釈尊から離れてしまうわけですが、それは、釈尊が苦行を完遂できなかったとみたからであ

ります。ここところは非常に重大なところであります。五人の供は釈尊の態度の豹変を見、釈尊の心が墮落したと思うわけでありま

す。釈尊は開悟後にこの五人に始めて仏法を説き、五人はこれまでの自分たちの釈尊に対する考えは誤解であつたと悟って、改めて釈尊の弟子になり、これが仏教教団最初の僧と

いうことなのですが、しかし供のほうが落伍しておらず、釈尊のほうから先に苦行をやめたということとは、後述のように看過できない問題だと思ふのであります。

釈尊はアーラーラ（阿羅邏）という仙人について、何物にも執着しない精神作用を保つ修行をしますが、これはその精神状態がもとにもどれば何にもならないとして、この仙人

のもとを離れ、別な仙人を訪ね、さらに、当時マガタ国で苦行者たちが集まっていたところに行き、そこで苦行をやるのですが（ここを苦行林という）、その苦行とは、①心を制御する、②呼吸を止める、③断食する、④食を減ずる、といったようなものだったそうです。

その厳しさは、かのガンダーラ美術に骨と皮ばかりのリアルな釈迦苦行像があり、中国や日本にも「出山釈迦」と称される画題があつて、鬚髪が伸びた骨皮姿の釈尊の画がありますが、これらはその厳しさを伝えているわけでありす。

こういった苦行を六年間続けられるわけでもあります、釈尊は前述のように、苦行によつて理想へは到達されないとして、これを放

棄するわけでもあります。そしてナイランジヤナー河（尼連禪河）で身を浄め、村娘の捧げた牛乳粥で体力を回復し、樹下に端座し静慮して、やがてお悟りを開くわけですが、私は、ここにすでに他力思想の発源を見るのであります。

釈尊は自ら、自分はいかなる修行者よりも徹底した苦行をしたが、最高の悟りは得られなかった、つまり苦行は無益であつたとして、苦行を放棄したとされているのですが、これは苦行という自力行の限界を知つたということにほかならない、と考えられるのであります。

すなわち釈尊は、自力の苦行では悟ることができなかつた、そして、自分の苦行を克服

することもできなかつた、私にはそう考えざるを得ないのであります。

仏伝には、そんなだらしない釈尊は描かれてはおりませんが、しかしその伝えるところをよく洞察してみますと、一緒に苦行していた五人の供が、釈尊の苦行放棄を怒っておりますし、娘が捧げた粥で命をつないだといった話などは、弱者釈尊そのものの、凡人釈尊そのものでありまして、人間としての限界がもろに出てきているのに気づくのであります。アーラーラ仙人のところなどでも、釈尊はずいぶんといじめられたらしく、古人の川柳に「アララほど小僧をいびり使うなり」とまでいわれる程に有名な話なのであります。

このようにして見てきますと、他力の思想

というものは、一部の学者さんがいうように、仏教内部で大分後になってから出てきた思想ではなしに、釈尊のご生活そのものにすでに他力がある、他力思想というものがはつきりと出てきている、とこう見てよいと思うのであります。すなわち、自力の限界を知るということであります。

前に申しましたように、釈尊が生まれてすぐ母を失った、そこに無常觀を基礎とする仏教の出発があり、出家はしてみたものの、苦行の完遂もできなかつた、そこに他力の発源というものがある、私はこう愚考するのであります。

お念仏の種はじつにここにあるのであります。

(函館・稱名寺住職)

テレビキャスターのアンゲル

②

ショーアツプされる死

利根川 裕

さきごろ、作家の重兼芳子さんが亡くなった。カルチャースクール出身の主婦が芥川賞を受賞したということで、かつて話題になった重兼さんであった。

その重兼さんとは、わたしは縁が深くて、ここ数年はともに、ある出版社の応募ドキュメン

タリー作品の選考者であった。春秋の年二回の募集だったから、ほぼ十回、選考の席で一緒だった。選考作品に関しては、一度も重兼さんともめたことがなかった。そういう意味で、たがいのものの見方や考え方が、よくわかりあっていた。毎回あまりに意見が一致するので、「こ

れでは二人いることはない。どちらか降りようか」という冗談が出たほどであった。因みにいえば、重兼さんとわたしは同年同月の生まれ。誕生日がほんの数日しか違わなかった。

重兼さんの場合、いわゆる葬式は執り行なわれなかった。それが故人の意志だったのかどうかは詳らかにしないが、出版社から「葬式の儀はございません」という連絡を受けた。わたしは、わが家でひっそりとご冥福をお祈りしただけである。

一般に、政治家の葬儀は盛大である。政治家は公人であるし、支持してくれた多数の有権者との別れとなると、どうしても大きな葬儀となるのであろう。

××組というそのスジの組長の葬儀も、まことに盛大である。おそらくそこでは、その組織の強大さを広く世間に見せる必要があるのだろう。いわゆる芸能人の葬儀もまた、華々しくなるのが通例である。芸能人もある種の公人であるから、これまた、そうなるのはやむをえないのであろう。

ところで芸能人（あるいはテレビ上での知名人）となると、テレビカメラが群がる。そして、つぎつぎに葬儀にかけつけた芸能人やタレントにインタビューする。いつもわたしは、テレビで通夜や葬儀の光景を見るのが、好きではない。いやである。もつと率直にいえば、ニガニガしくなる。その理由

を一言でいうなら、人間の死にふさわしい光景ではないからである。

まず、インタビューというのが氣にくわない。ぶしつけにテレビ局のマイクをつきつけるテレビ局もテレビ局であるが、それに応じるほうも応じるほうである。

芸能人の通夜や葬儀がテレビで報じられるのが日常化したいまでは、そこへやってくる芸能人やタレントも、テレビに映ることを予想し、インタビューされることを予期してくる。

有体にいえば、彼らは自分がどんなテレビ効果をあげるかを計算して駆けつける。誰もが着る喪服と違った衣裳にしてくるものもある。大

物だった故人と自分がいかに親しかったかを述べたてようとするものもある。この種の人たちにとっては、葬儀もまた自分を目立たせるための絶好のチャンスなのである。そして彼らは、まるでテレビに出演したときのように、テレビ受けする仕ぐさとセリフを、ぬけぬけと演じてみせるのである。かくて葬儀は一種のイベント・ショーになる。

芸能人とかタレントとか有名プロスポーツ選手とかの、いわゆるスターの結婚披露パーティは、しばしばテレビ局とのタイアップになる。法外なテレビ放映料が支払われることになる。

このところ、にわかに人気が出たプロサッカーであるが、そのスターの一人が結婚するとき、やはりあるテレビ局が動いた。Jリーグ人気を利用しようとするテレビ局の思惑である。が、このスターは「自分の結婚まで売る気はしません」と断わった。これは、最近のいい話である。

まあ、結婚披露パーティというのは、大慶事のイベントだから、テレビ的にショーアップされるのはいいとして、ちかごろは葬式をテレビ局とタイアップしようとする動きもある。事実、大スターの死で、そうしたプロダクションがあった。このプロダクションは、こうして故人の人気をもう一度盛りあげ、そうすること、生前の出演映画や歌のレコードを売りまくろうと

企てたのである。

こうして、死はワイドショー化され、商業化され、さらに娯楽化されてゆく。そして、これがテレビによって大いに増幅されて社会に広がってゆくのである。

テレビのワイドショー番組では、知名人の死だけでなく、たとえば死に至る病気に冒された人をも、まるでイベントのようにショー化する傾きがある。

つい先日、バラエティ番組などの司会者として大いに顔と名の売れているタレントの「ガン告知記者会見」がテレビに放映された。

自分の死期にまで触れたこの会見は、各テレビ局がかなりの時間をかけて放映し、しかもそ

の翌日も大々的に繰返された。

この会見に、タレントの商業化された意図が隠されていたとは思わない。本人は率直にガンを告知され、死と対面せざるをえなくなった自分自身を、つとめて冷静に語っていて、それが見ている人の胸にもじーんと伝わってきた。本人の身になってみれば、どんなにつらいことか、またどんなに勇気のいることか、またどんなに覚悟をかためたことか、じつに追いつめられた心境であろう。

が、わたしはこのテレビ会見を見ていて、やはり素直には受け入れにくい気持ちに促されていた。というのも、自分の病気をなぜこんなに

も特殊化し拡大化するのだろうか、という疑問である。

彼ひとりが、例のないような不治の難病や奇病に冒されたわけではない。ガンに冒された人、ガンを告知された人、そしてガンと闘っている人、ガンを克服した人、あるいはついにガンに敗れていった人は、彼のほかにもたくさんいる。ガンに限らない、いかなる人も、やがては死に至る病に冒されるのである。

生あるものにとって、死は避けられない。いいとはいえないが、いつか必らず死はやってくる。死から免れえた人などというものは一人もいない。

だから当然、あらゆる人は死に至る病に冒されざるをえない。死に至る病もまた逃れるわけにはいかない。

死は万人に平等にやってくる。死に至る病も、万人に平等にやってくる。これが生あるものの基本的な平等である。

かつてパスカルは「人はただひとり死にゆくであろう」といった。死は誰によっても代ってもらうことができない。

死はたいへん個別的である。絶対に孤独である。その絶対的孤独のなかで、生あるものには避けられない運命を、万人平等に担うほかは

ないのである。

死に対する現代のテレビ現象は、そういう死の本質を見据えることなく、一種の見せものになっているのではないか。

重兼芳子さんは生前、ホスピスの活動にたいへん関心をもって、みずから死に近い人のところへゆき、世話し、看護し、死について語り合っていた。

重兼さんには、ともに死者となった仲間がたくさんいた。重兼さんは、ひっそりと、その仲間の一ひとりになっていった。そこに重兼さんには人間の死の尊さがあった。合掌。

(テレビ朝日系キヤスター・作家)

法然上人のお念仏

ひろさちや

建暦二年（一一二二年）正月二十五日正午頃、

浄土宗の元祖の法然上人は入寂された。「南無阿弥陀仏」と称えながら、眠れるがごとくにこの世を去って逝かれた。八十歳であつた。

法然上人が病床に就かれたのは正月二日。その翌三日に、お弟子の問いに答えて、法然上人はこう言われた。弟子は上人に、「極楽往生は確實ですか？」と尋ねたのである。

「我もと居せし所なれば、さだめて極楽へ帰り行べし」

自分のもと極楽浄土にいたのだから、きつとその故郷の浄土に帰って行くだろうよ……。いいことばである。

わたしは、このことばのうちに、法然上人のお念仏の教えを正しく理解する鍵があると思っている。つまり、わたしたちはみんなお浄土からこの娑婆世界に來ている人間である。わたしたちは、この娑婆世界では「凡夫ぼんぷ」と呼ばれる存在であるが、わたしたちの故郷はお浄土であり、本籍地はほとけの国である。本籍地からい

えば、わたしたちはほとけの国の人、ほとけの子なのである。法然上人はそうのように考えておられたのだ。

だとすれば、わたしたちが日常どのような態度でお念仏を称えればいいか、このことばかり明確になる。それを以下に解説したいと思うが、その解説のために、いささか回り道ではあるが、中国唐の時代の禅僧の話を紹介しておく。

*

南岳なんがくえいよう懷讓の弟子に馬祖道一ばそどういつがいた。南岳も馬祖も、ともにすぐれた禅僧である。しかしこの話は、馬祖がまだ南岳のところまで修行中の話である。したがって、馬祖には禅の何たるかがよくわかっていなかった。

ある日、馬祖が坐禅をしていた。

そこに師の南岳がやって来て、おまえは何をしているか、と尋ねる。もちろん、馬祖は、坐

禅をしています、と答える。

「何のために坐禅をやっているのじゃ？」

「仏になるためです」

すると、南岳はそこに落ちていた磚せんを拾って、石の上で磨きはじめた。磚とは敷瓦である。

今度は馬祖の問う番だ。

「何をしておられるのですか？」

「見ればわかるじやろ。磚を磨いておる」

「磨いてどうされるのですか……？」

「鏡にしようと思っている」

「でも」と、馬祖は言った。「磚はいくら磨

いても鏡になりませんよ」

そうすると、南岳はこう応じた。

「おまえ、それがわかっていながら、どうして坐禅をして仏になろうとするのか……!？」

南岳はこれでもって、馬祖の迷妄を開かせようとしたのだが、はたしてそのことばで馬祖が

禪の何たるかを了得したか、どうもそうではなかつたらしい。

さて、これはどういうことか。南岳が教えたかつたのは、このことであらう。

磚はいくら磨いても鏡にはならない。鏡だからこそ磨いて鏡になるのだ。

それと同じく、凡夫はいくら坐禪をしても仏にはなれない。仏だからこそ坐禪をすれば仏になれるのである。

これは非常に論理的だ。つまり馬祖は、自分は凡夫であると思つてゐる。凡夫である馬祖が一所懸命修行をやつて、仏になろうとしてゐる。それじゃあ仏にはなれんぞ。自分ははじめから仏なんだ。仏だからこそ、修行をして仏になれるんだと考えるべきだ。南岳にそう教えたかつたのだ。

だとすると、禪においての修行は、いわば仏

が修行しておられる姿である。凡夫が仏になろうとして修行しているのではない。凡夫は仏になれないのである。

ということは、修行とは、仏が生活している姿そのままである。凡夫が特定の時間を限つて修行しているのではない。仏が生活している二十四時間が、そのまま修行である。禪においてはそう考える。

だから、坐禪だけが修行ではない。顔を洗うのも、食事をするのも、通勤する時間も、会社で仕事をしているときも、すべてが修行なのだ。仏らしく顔を洗い、仏らしく食事をし、仏らしく仕事をすれば、それが修行である。眠るのだから修行だ。われわれは仏らしく眠ればいい。仏らしく眠るならば、それが坐禪である。

これが禪の考え方だ。

繰り返して言つておく。われわれは、仏にな

るために修行するのではない。仏だから修行ができるのであり、仏が仏らしく生きるのが修行である。

*

さて、お念仏である。

わたしたちは、何のためにお念仏を称えるのであろうか……？

もちろん、「南無阿弥陀仏」のお念仏を称えて、それで阿弥陀仏に救っていただくためである。普通にはそう考えられている。

けれども、そのような考えだと、さまざまな疑問が出てくる。

まず第一に、本当に「南無阿弥陀仏」のお念仏を称えれば、阿弥陀仏は救ってくださるだろうか……という疑問である。万が一、阿弥陀仏がわたしの念仏を聴き漏らされたら、わたしは救われないことになるが、そういう心配はない

だろうか。わたしの念仏を必ず阿弥陀仏が聞いてくださる保証はどこにあるか？

それにまた、いったいお念仏は何回称えなければならぬのか？ 数が多いほどいいのか……？ 数がいくら多くても、その念仏に心がこもっていなければよくないのか？ それじゃあ、しっかりと心をこめて念仏すれば、たった一回の念仏でもいいのだろうか……？

いくらでも疑問が出る。

だから、法然上人のお弟子の間においても、意見が分かれた。すなわち、

—— 一念義と多念義 ——

である。一念義というのは、たった一回の念仏でいいとする主張であり、多念義は数多くの念仏を称えるべきだという意見である。どちらの主張にも、それなりの根拠はあった。

では、法然上人は、その問題をどのように考

えておられたか……？

じつは、法然上人という方は、非常におおらかな人である。法然上人にその問題を問えば、きつと一回でもいいし、多数回でもいいと答えられるであらう。

たとえば、法然上人はこうのように言っておられる。

現世をすぐべき様は、念仏の申されん様にすぐべし。念仏のさまたげになりぬべくば、なになりともよろづをいとひすて、これをとゞむべし。いはく、ひじりて申されずば、め（妻）をまうけて申すべし。妻をまうけて申されずば、ひじりにて申すべし。住所にて申されずば、流行して申すべし。流行して申されずば、家にあて申すべし。自分の衣食にて申されずば、他人にたすけられて申すべし。他人にたすけられて申さ

れずば、自力の衣食にて申すべし。一人して申されずば、同朋とともに申すべし。共行して申されずば、一人籠居して申すべし。衣食住の三は、念仏の助業也。

——この世の生き方は、念仏できるように生きたらいい。念仏の妨げになることはやめたほうがいい。聖ひじりで念仏しにくいのであれば、妻帯すればいいし、妻帯して念仏できないのであれば、聖になれればいい。家に住んでいて念仏できないのであれば、遊行すればいい。遊行で念仏できないのであれば、家に住めばいい。自活すればいいし、他人の世話になって念仏できないのであれば、自分で生活費を稼いで念仏すればいい。一人で念仏できないのであれば、仲間と一緒に念仏すればいい。皆と一緒に念仏できないのであれば、独り閉じ籠って念仏すればいい。

衣食住の三つは、みな念仏を助けるものだ。

法然上人は、あまりやかましいことは言わない。わたしたちの毎日は、念仏ができるように生きればいい。公務員で念仏できなければ、辞めてアルバイトをしながら念仏すればいいのだし、これこれの職業でなければならぬということはない。独身でもいいし、結婚していてもいい。ただ、念仏できさえすればいいのだ。

法然上人の考えは、まったく「自由」である。

わたしは、そういう法然上人が大好きだ。

だが、……。

正直に告白すれば、わたしは法然上人のそういうおおらかさは好きであるが、それではいささかでたらめにすぎないか……といった感じがしないでもない。どうも釈然としないのである。

*

ところが、そのわたしのもやもやが、「我もと

居せし所なれば、さだめて極楽へ帰り行べし」と言った法然上人のことばによって吹っ切れた。

このことばを知ったとき、わたしは、

ああ、そうなんだなあ……。わたしたちはみんな、極楽浄土からこの娑婆世界に来た人間なんだ。だから、わたしたちは阿弥陀さまの子どもなんだ。わたしたちが阿弥陀さまの子であることを自覚して、極楽浄土におられる阿弥陀さまに話しかけるように念仏する。そういう念仏を法然上人は教えてくださったのだ。

と、目の鱗が落ちたような気がした。お念仏というものの本当の称え方がわかったように思われた。

そうなんだ。わたしたちは、「阿弥陀仏よ、わたしを救ってください」と阿弥陀仏に頼むために、「南無阿弥陀仏」のお念仏を称えるのだ

と考えている。普通にはそう思われているが、それは違うのだ。それは違う——と法然上人は言っておられるのである。

まさに逆である。

わたしたちはお浄土からこの娑婆に來た人間だから、お念仏が称えられるのである。お念仏を称えて、お浄土に往くのではない。お浄土からやって來た人間だから、念仏できるのである。

念仏をして、阿弥陀仏に救っていただくのではない。救われているから、お念仏ができるのである。

だとすれば、……。

そこで、わたしはこう思う。お念仏というものは、わたしたちがふるさとである極樂浄土へかける。

——電話——

なのだ、と。ふるさとにおられる阿弥陀仏に、

「わたしは元気でやっていますよ」と報告する電話である。そう考えると、ぴったりである。

阿弥陀仏は、いつもわたしたちの電話を待っておられる。だから、わたしたちは、できれば頻繁に「南無阿弥陀仏」の電話をかけたほうがいい。そうすると、きっと阿弥陀仏は喜んでくださるであろう。その意味では、お念仏は数多く称えたほうがいい。

でも、かりにわたしたちが忙しくて、お浄土に電話をかけ忘れても、それで阿弥陀仏が怒れるということはない。便りのないのはよい便りということわざがあるが、きっとあの子は元気でやっているのだろう……と、阿弥陀仏はそう思っていてくださる。なにもわたしたちは、念仏を義務と思う必要はない。そんな義務感でもってかけてくる電話は、阿弥陀仏にしてもあまりうれしいものではない。阿弥陀仏は、わた

私たちの元気な声を聞きたいのだから。

それから、お浄土にはときどき無心の電話がかかってくる。学生時代、わたしも親に「金を送ってほしい」といった無心をよくした。「病気になるった、助けて……」「借金で困っている、なんとかしてください」といった、そんなお願いの「南無阿弥陀仏」もある。そんな電話はいけない——と、果たして阿弥陀さんは叱られるであろうか？ わたしは、そうではないと思う。そんな電話でも、きつと阿弥陀仏は喜んでくださる。わたし自身が一人の子どもの父親だから、阿弥陀さんの気持ちは見当がつくのである。極道者ほど親はかわいいと言いますよね。

お念仏とは、阿弥陀さんへの電話である。

わたしたちは、そういう気持ちで、気軽に阿弥陀さんに「南無阿弥陀仏」の電話をかけましょうよ。極楽浄土への電話は長距離電話だけど

（西方十万億土というから、ものすごい長距離だ）、不思議なことに「南無阿弥陀仏」の電話は無料である。長電話したって大丈夫だ。あ、それから、この電話はコードレスの携帯電話である。いつでも、どこでもかけられるから、大いに利用してほしい。

……わたしは、このような念仏の考え方が、法然上人の考えだと思う。阿弥陀仏に電話でもかける気持ちで、「南無阿弥陀仏」のお念仏をなさい——と、法然上人はわたしたちに教えてくださったのだと思う。

そう考えると、なるほどお念仏は称えやすい。わたしはそう考えて、これから、できるだけ頻繁にふるさとへの電話をしようと思っている。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、……」

（宗教評論家・宗教文化研究所長）

●四月号から三回続けた表紙の写真「落日」を変えた。四月号の本欄で「落日」は日想観に基づく「浄土」の象徴として採り上げた」と記したが、意図する使命は一応終えたという判断で終了したものである。都会に近い海上の落日では清浄さに欠ける、といったレイアウトマンの進言で、わざわざ九州在住の写真家に依頼し、約二百枚の落日写真ばかりの中から選んだ一点が四月特大号の表紙を飾った。いずれかの機会に、浄土の落日をパネルにでもして広く頒布したいと考えている。

●随想欄の長谷川岱潤師は、改装前の本誌にも何回か登場した若き学究であり、今号では誌上からの呼びかけという異例の形をとったが、一人でも多くの賛同者が出てほしいと願っている。

●同じ欄の吉野弘氏は大正十五年生まれの詩人で、一部に熱狂的なファンを持つ詩壇の異才である。ほぼ十二年間、私は詩の選者としての吉野氏に編集者として接した期間があり、いかにも東北人らしい誠実さを忘れきれず、本誌に執筆をお願いした。そうした吉野氏の姿が読者にも伝われば幸いである。

●巻末随想のひろ・さちや氏は講演や執筆で超多忙の中で本誌へご寄稿くださった。折しもNHKテレビの「歴史

発見」で親鸞上人の悪人正機に触れ、もちろん我々が法然上人も登場されるのだが、ひろ氏の名解説を以てしても、やはり在家の視聴者にはかなりむずかしいかなと危惧もした。しかし、本号のひろ氏の文章はまことにわかりやすく、とてもあのテレビ放送の比ではない。一念義、多念義をはじめ、我々が申すお念仏の本旨を伝えて余りもない。本誌は施本を作るつもりなど毛頭ない、と大見得を切ったこともあったが、どうか在家の念仏信仰者に味読、熟読をおすすめしてほしいものである。

●季節は夏から秋に移ったが、このぶんでは冬の到来もすぐ真近いに近い。読者の皆さんのご健康を祈るや切である。

(編集チーフ・小川有順)

●お知らせ

本誌をまとめて購入を希望される方は、一〇部以上を単位に法然上人鑽仰会までお問い合わせください。頒価その他について詳しくご説明申し上げます。なお、四月号以降の分も残部が少々ございます。

●お詫び

去る四月に法然上人鑽仰会と浄土宗浄業会が合併して、新法然上人鑽仰会が再組織され、現代のニーズに相応した信仰運動が展開されることとなりました。その後数カ月を経過しましたが、旧事務所大道社から新事務所明照会館への移転をはじめ、新会則による会員各位の移行手続き、それに伴う会費精算等に思わぬ時間がかかり、併せて、本会の中核をなす「浄土」誌の刊行が、四月特別増大号以降遅延をいたし、会員読者各位には大変ご迷惑をおかけいたしましたことを深くお詫び申し上げます。ようやく見通しがつき、準備期間として五・六月を合併にさせていただき、今後もしばらく毎月発行予定が遅れますが、事情ご賢察の上今しばらくご理解の程よろしくお願い申し上げます。(編集人・宮林昭彦)

浄土 五十九巻 九月号 頒価五百円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷——平成五年八月二十五日

発行——平成五年九月一日

編集人——宮林昭彦

発行人——牧田諦亮

印刷所——文化カラー印刷株式会社

写真植字——文化フォントタイプ

〒一〇五 東京都港区芝公園四・七・四 明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三五七八)六九四七

結局、 黒ラベル。



いつでも・どこでも・誰とでも……
楽しく飲める〈黒ラベル〉。



サッポロ〈生〉黒ラベル

すっきりが、いい。 新しいローレルと、日本。



頒価五百円

Photo:ローレル25ツインカムメダリスト(オプション装着車)



松方は、**◎**りゃあいいと思った。
◎本木は、**◎**るほどと感心した。
◎方・**◎**木の**◎**ローレル評判記。LAUREL誕生。



松方:直線的なスタイリングが新鮮。こんどのローレルは端正だ。本木:キャビンがゆったり、視界も広い。すっきり運転できる。

ローレル25ツインカムメダリスト-----全長4710×全幅1720×全高1380(mm)/主な装備●RB25DE(4気筒ツインカム・総排気量2498cc)エンジン●最高出力190PS/6400rpm(※NET値)●最大トルク23.5kgm/4800rpm●フルレンジ電子制御5速オートマチック●電子制御パワーステアリング●オープンセーフットエアコン●ローレルサウンドシステム/(※NET値)とは、エンジンを車両に搭載した状態とは同条件で測定したものです。
●日産自動車株式会社お客様相談室:東京Tel.(03)3545-2323/札幌Tel.(011)722-8823/名古屋Tel.(052)951-8823/大阪Tel.(06)536-1123/福岡Tel.(092)451-8823-----お近くのローレル販売会社へ